

## 会員の広場

### 「句会・漆の実」の活動

当句会も、新型コロナウイルスの猛威のため低調に終了しました。二月までは開催しましたが、三月以降は状況が一変のため休会とし、六月に一旦再開したものの、会員の安全を考慮し年内は休止としました。それでも今年の三回の句会には次のような句が注目されました。

(氏名・五十音順)

道着肩に現わるる娘や初稽古

大田 甘美

水切りの七八連や青葉風

片山 丹波

柚餅子みな土の色かな春一番

小山八州史

ときのけの街に卯の花腐しかな

佐野 眞

一筆箋めいて紫陽花ひと葉散る

濱田 扇風

笑む地藏四葩の径の青の濃さ

松原 薫子

なお、長年にわたり力作を発表され、当会に絶大な尽力を下さった池田弁之助氏は体調管理のため一時休会

中。登坂かりん氏は所用が重なったため欠席されました。今年の特筆することは、「二〇一九年度・自選句集」が五月に刊行されたことです。

鈴木淳一主宰のご逝去のあとは、小山八州史がアドバイザーとして会員の協力のもと今日まで継続してきました。この自選句集から次のような佳句をご紹介します。

富士登頂風に諦め夏終る

大田 甘美

陽春や羅漢五百の人いきれ

片山 丹波

縛りある缶の銭箱冬菜売る

小山八州史

夏の暮影法師追いてけんけんぱ

佐野 眞

檀家代表空席のまま彼岸寺

登坂かりん

枝渡る寒の小鳥の重みかな

濱田 扇風

嵐過ぐ港一変月凄し

松原 薫子

なお、本年二月、かつて句会の連衆として飄逸な句風、評論をもつて楽しませてくださった松坂六儀氏ご逝去の知らせがありました。

ご冥福をお祈り申し上げます。

昼日中プールサイドで一寝入り

松坂 六儀

【小山八州史・報】

## 萬世大路が

## 「未来に伝える山形の宝」に登録

梅津 幸保

はじめに

令和二年二月五日、山形県庁において、吉村美栄子知事から萬世大路が「未来に伝える山形の宝」としての登録証をいただきました。萬世大路保存会として誇りに思っています。

改めて萬世大路のすばらしさを紹介します。栗子山の大自然の素晴らしい魅力と、明治の土木偉業の偉大さが感じられます。三島通庸山形県初代県令の土木県令と言われる所以でもあります。昨年とうほく街道会議が福島県担当で開催されました。そのときの講師平沼氏から廃道の聖地であると紹介され、廃道マニアはここを訪れなければマニアとは言えないとの指摘がありました。今年十月に萬世大路に関わる明治十四年開通の馬車の通れる隧道、昭和十二年の自動車道の大改築、昭和四十一年の冬季も通行可能な栗子ハイウェイ、平成二十九年開通の東北中央自動車道（高速道路）と四代の映像を取り入れ

たDVDを山形の宝登録を記念して制作しました。大好評で、二〇〇部は完売しました。今追加の手続きをしています。少し時間がかかるとは思いますが、希望者は事務局の万世コミセンにご連絡ください。（TEL・・・二三八・二八五三八一。一部一〇〇〇円＋送料一八〇円振込用紙を入れて送ります。）

### 一「萬世」という地名について

明治二十二（一八八九）年七月八日市町村制施行により、周辺の梓山村、桑山村、金谷村、堂森村、片子村が合併して萬世村となった。昭和二十九（一九五四）年米沢市と合併して米沢市万世町となる。平成十一（一九九九）年に片子地区が東部地区に編入され、刈安、梓山、桑山、牛森、堂森、金谷地区が万世地区となる。

### 二「萬世」の由来

中国の古典に四書五経と言われる書籍があり、その中の尚書（教書）の一部に「萬世永頼惟汝功」という文章がある。これは明治天皇が三島通庸山形県令の栗子隧道開鑿の業績を大変良くできているとお褒めになった言葉である。明治天皇から明治十五年一月に新道を「萬世大路」と命名された。萬世という地名が明

治二十二年に初めてできた。

### 三 萬世大路の長さ

米沢市の相生橋から福島市まで約四十八キロメートルある。トンネルが三か所、橋が七か所ある。栗子山の高さは一、二一六メートルあり、標高八八四メートルのところに八六七メートル（四八二間）のトンネルを掘った。これが栗子山隧道である。その他に刈安洞門と二つ小屋隧道がある。橋は相生橋、吾妻橋（万世橋）、瀧の小橋、瀧岩上橋、杭甲橋、大平橋、烏川橋がある。

### 四 栗子山隧道について

明治九（一八七六）年十月十五日から一週間高木秀明土木課長らが現地調査。明治九年十一月二十五日工事着工する（完成予定は明治十年十一月とする）。当時のトンネル掘は手掘りであり、鉄のノミと金づちであった。幅三間（約五、三メートル）、高さ二間（約三、六メートル）であり荷馬車が通れる道路とした。勾配は平均九％であった。手掘りの工事は難航して進まなかったで、三島県令は、世界に三台しかなかった蒸気削岩機を買い入れてダイナマイトを仕掛けて工事を進めた。結果は工事が進み、明治十三年十一月十九

日に貫通した。

その後一年をかけて沿道を整備し、明治十四（一八八一）年十月三日、明治天皇が東北御巡幸の時ここをお通りになり開通式を行った。今年で二三九年、初代の隧道。

### 五 宿場と交通の状態

栗子山隧道が完成したことにより、梓山に一軒、刈安に三軒、瀧の澤に一軒、栗子山隧道前に二軒の宿屋ができて繁盛した。当時の記録では、一日の交通量は人七十〜一二二人、荷車十〜二十七台、馬五〜十七匹で当時としては相当の賑わいであった（電気のない時代の真つ暗なトンネルをどのようにして通ったか）。

道路の補修や雪道の雪ふみには囚人たちが作業に当たった。それも西南の役で投獄された鹿児島の子島の先輩たちであった。三島県政を助けたといわれる。

### 六 鉄道の開通

福島〜米沢間の鉄道が開通したのは、明治三十二（一八九九）年五月十五日であった（栗子山隧道開通後十八年）。人、物資の輸送は鉄道に代わってしまった。それからは栗子山隧道を通る人はいなくなった（汽車賃のない人が歩いて通る程度）。宿も廃業となっ

た。

## 七 自動車の普及による道路改築

昭和八（一九三三）年になって自動車普及したので、栗子山隧道の幅を広げて自動車が行ける道路に大改築した。昭和十二（一九三七）年三月に完成し自動車が行けるようになり便利になった（三十八年ぶりに栗子隧道が行けるようになった）。しかし、冬期間は除雪が間に合わず不通であった。二代目のトンネル。

## 八 現栗子ハイウェイの建設

米沢市にとっては冬期間も行ける道路が必要となった。国に働きかけて昭和三十六年から東栗子トンネルと西栗子トンネルを持つ現栗子ハイウェイの建設を進めた。五年の歳月がかかり昭和四十一（一九六六）年五月二十九日に開通した。今年五十四年目。三代目のトンネル。

## 九 東北中央自動車道の開通

現在の高速道路は東北中央自動車道として建設された。福島県相馬市から米沢、山形を通って秋田までの道路で、平成二十九年十一月四日に福島～米沢間が開通した。時間は今までの四十分から二十分で行けるようになり、無料の高速道路である。栗子トンネルは、

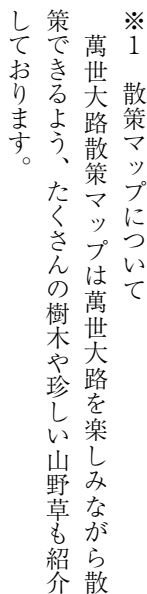
八九七二メートルあり全国で五番目の長さである。四代目のトンネル。

## 十 萬歳の松公園について

万世小学校の校歌の歌詞二番に「いにし明治の十四年十月三日の駐輦（ちゅうれん）をおおぎまつりしみ跡にいともととき庭なるぞ」がある。又、明治天皇が御休憩されたこの観音原（元万世小学校の庭）に、町村合併を記念して明治天皇御休憩跡地に明治二十二年、松の木を植えた。これが平成二十一年三月十七日に山形県景観重要樹木第一号に指定された萬歳の松である。平成三十年十一月四日市が都市公園として整備した。明治二十八年四月には『駐輦の碑』が建立された（輦は鳳輦と云って天皇のお車である）。

## 十一 記念碑公園について

平成二年十一月に開園された萬世大路記念碑公園（国道十三号刈安地区）には、萬世大路に立てられた明治天皇に関わる記念碑や工事改築の記念碑、栗子神社碑が移設されている。また、隧道の手掘りの跡のレプリカなどがある。そして、栗子隧道西口にあった「栗子隧道碑記」の碑は、平成三十年四月二十日に道の駅米沢に移設した。



高橋由一画 栗子山隧道西口図  
山形大学付属博物館蔵



昭和41年5月29日開通栗子ハイウェイ西口



# 漆成分の研究に携わった長俊一

甲 國 信



横浜国立大学付属図書館蔵

日本の有機化学の黎明期における研究として、「漆成分の研究」が有名である。日本発の最初の本格的有機化学研究といつてよい。この研究は明治三十八年に東京帝国大学理科化学教室で、眞島利行助教（当時）と米沢出身の学生長俊一氏によって始められた。長俊一氏については、松野良寅著『興譲館人國記』<sup>(1)</sup>に紹介されているが、ここでは、そこに語られていない研究とその周辺を紹介する。

平成五年十一月、眞島利行東北帝国大学教授<sup>(2)</sup>を記念するシンポジウムが仙台国際センターで開催された。日本

の有機化学の黎明期における歴史的研究所と云える「漆成分の研究（ウルシオールの研究）」をはじめとする先生の数々の業績に対しては、昭和二十四年文化勲章が授与され、近代日本の開拓者として高く評価されている。<sup>(3)</sup>

記念講演では、「眞島先生と日本の有機化学の夜明け」との題で、東北大学における最後の弟子である久保田尚志先生（大阪市立大名誉教授、昭和七年卒、学士院賞受賞者）が話された。<sup>(4)</sup> 久保田先生の講演は大変興味深いもので、眞島先生は有機化学を独学で勉強したこと、よちよち歩きをはじめた日本の有機化学が、世界と競争できるようになるには何が必要かを知るために、大研究の研究と称して世界の大家の論文を読み漁ったことなどが語られた。漆を研究対象に選ばれた理由は、日本の漆工芸の素晴らしさは世界に知られているので、世界の研究者から注目を得やすいと思ったこと、他国の研究者よりも材料の入手しやすさの点で有利と考えた点にあったということである。とは言え、精製しやすい結晶を対象にするのが普通の時代、敢えて油状物質を研究対象に選ぶことはかなりの冒険だったはずである。

## 眞島先生と卒業研究の学生長俊一

次に示した括弧内の文章は、久保田先生がスライドで

示した眞島先生の自伝の一部である。このスライドで私は長俊一氏を初めて知ることになった。

「私は明治三十九年の卒業生の時から、全部の学生が卒業前に必ず何か研究して其成果を発表することを池田教授に進言して其賛成を得て其の以降は之を行うことになった。之が漸次他の大学にも行われて今日に及んで居るのである。併し私の如き若輩の助教授には誰も指導を乞うまいと思ったのに、長俊一君が私の指導を受けることを申出られた。そこで漆の乾留<sup>(5)</sup>を長君の卒業研究として、同君と共に之を行つたのは甚だうれしいことであつた。上記の研究を遂行して、後に長君と連名で獨逸化学会誌<sup>(6a)</sup>、東京帝大理科紀要及び東京化学会誌<sup>(6b)</sup>等へ発表した。これが私の漆に関する最初の報告となつたのであつた。」

眞島先生の自伝の中で、特定の学生についてこれほど詳しく語られた箇所は他にない。

この長俊一という名前に長俊英元米沢市長（講演のあつた平成五年当時は高橋幸翁市長）との関連が頭をよぎつた。元市長の父上は、テレビジョンの研究で有名な浜松高等工業学校の校長をされた方と父から聞いたことがあり、電子工学関係の方と思つていたが、ひよつとする

と化学を専門とされたのかも知れない。講演を終えて降壇された久保田先生に長氏とはどんな方かお尋ねしたところ、東大時代のお弟子さんについては手がかりがなくてよくわからないとのこと。ひよつとしたら米沢の方かもしれませんと申し上げたら、君、調べてくれないかということになった。俊英氏に電話して久保田先生の講演のことを話し、父上かどうかをお聞きしたところ確かにそうだとこのことで、この時点で長俊一氏は私にとって長俊一先生となつた。郷里出身の有機化学の大先輩であるばかりでなく、曾孫世代ではあるが、私も眞島先生に繋がっているからである。久保田先生にはすぐに報告した。

長先生は明治十四年生まれ。明治三十二年米沢尋常中学興譲館を卒業後、仙台の第二高等学校に進み、さらに東京帝国大学理科大学化学科に進学、眞島先生と出会つた。卒業研究が行われた明治三十八年は、前年に始まつた日露戦争が続いており、また、夏目漱石が「我輩は猫である」を発表した年でもある。

長先生は良き指導者を得て、学部卒業研究が世界の一流雑誌に掲載されるという、研究者としてこの上ないスタートを切り、明治三十九年春の卒業後は、引き続き大学院に進学し研究を続けた。しかし、指導教官の眞島

先生が翌四十年一月から欧州に留学することになり、同年四月に大学院を退学し広島高等師範学校教授として赴任した。

### 広島高等師範学校時代

十一年間の広島高師時代の先生について、資料を探したところ、国会図書館の所蔵資料に六冊の著書があった。<sup>(7)</sup>『普通教育 化学教科書』<sup>(7a)</sup>は広島に赴任して三年後に書かれた。本業の傍ら、中学生対象の教科書を執筆した動機は、自身の中学時代には適当な理系の教科書がなく、理解するのが困難だったことと、化学の先生の熱心な指導により、化学の道へ進むことを決めるに至ったことにあったと思われる。

教科書を執筆するには、教えたい項目の取捨選択をしなければならぬ。化学の分野全体を俯瞰する目と見識が必要な作業であり、当時弱冠三十歳の先生がこれを成し得たことに驚きの念を禁じ得ない。さらに五年後、教科書の内容を深く理解できるように、千二百ページの参考書「参考近世化学講義」<sup>(7c)</sup>を出版、いかに教育に本腰を入れていたかが窺える。

### ウルシオール研究の後

長先生との研究により漆の成分の化学構造に見当をつ

けた眞島先生は、留学先でも漆の研究を続けた。さらに、最終的な構造決定に必須になるはずの当時最新の実験法であったオゾン分解、接触還元等の実験法を習得し、実験装置を持ち帰った。明治四十四年一月帰国。東北帝国大学理科大学教授に任命され、化学科の設立に関わり、その業務が一段落した翌四十五年初めウルシオール研究を再開した。先生と共同研究者の奮闘の結果、大正七年までにウルシオールの構造が明らかになった。

### 横浜高等工業学校時代とその後

大正九年、長先生は新設された横浜高等工業学校に応用化学科の教授として赴任した。新任地では研究ができた。広島では教育に専念した先生ではあるが、研究への思いは止みがたかったのだろう。対象に選んだのは、研究が世界で始まって間もない油脂である。

しばらくして先生は欧米諸国を視察し、ドイツに留学した。このドイツ留学中の大正十二年九月一日に起きた関東大震災が、先生の研究者としての将来を奪うことになった。子息の俊英氏によると、この震災で研究データを焼失してしまい、研究者としての将来を諦め、昭和二年文部省督学官に転身したとのことである。歯車が順調に回り出した矢先、またしてもの不運である。



昭和四年、有為会の座談会に招かれた先生は、当時米沢から人材が出なくなったのは教育に欠陥があるからではないかと取りざたされていることについて、教育の普及に伴い、勉学の意欲に乏しいものまでが親に頼まれるようにして高等教育を受けるようになっていくが、大学を出たらずに要職につける時代ではなくなったことを認識すべきであると、時代の変化に注意を促し、さらに自身の世代の勉学意欲について触れ、(廃藩置県で俸禄を失い貧窮した)士族の子弟が勉学して身を立てようとした。そもそも決心が違っていた。親も応援したが、それでも勉強ばかりしていられた訳ではなく、米を搗いたり畑を耕したり、家の手伝いをするのがあたりまえだった、と語っている。(8) 幕末・明治前期生まれの目に映った明治後期生まれの像が興味深い。時代の大きな変化が見て取れる。

昭和七年、長先生は浜松高等工業学校の第三代校長として教育の現場に戻った。昭和十一年には広島高等工業学校に移り、第二代校長として七年間厳しい戦時体制下の高等教育に心を砕き、学生には紳士教育を徹底し、研究者としての自覚と自学自習の態度の養成を力説、得点主義を排し、実力主義時代に適合する人材の育成を主眼

として教育に当たった。(1) 昭和十八年六月、在職中に六十一歳で急逝した。校誌は「(前略) 強健にして記憶力の正確、透徹したる理性と相俟って尚将来に期待せらるる処多大なるものありしに今や虚し。謹みて哀悼す。」と校長の死を悼んでいる。

このたび有為会誌への寄稿を思い立ったのは、久保田先生が亡くなられ、ウルシオール研究という日本の有機化学における歴史的研究に、米沢出身の長先生が携わった事実を知る者が筆者だけになってしまい、何もしないと、郷里の先人の足跡が埋もれてしまうと思ったからである。

眞島先生の下で、研究者として順調なスタートを切った長先生は、何事もなければそのまま研究者の道を進んだものと思われる。巡り合わせにより教育者となつてその道を全うした先生ではあるが、眞島先生の東北大での直弟子から、文化勲章受章者二人を含む逸材が輩出していることを考えると、(9) もし最初の弟子である長先生が研究者の道を歩き続けていたら、との思いを禁じえない。

最後に、資料の収集に便宜を図っていただいた広島大学文書館、横浜国立大学付属図書館、日本化学研究会に感謝する。

(仙台支部長・東北大学名誉教授)

文献と注

- 1 松野良寅『興譲館人國記』米沢興譲館藩学創設三百年記念事業実行委員会 平成十年
- 2 明治四十四年三月東北帝国大学理科大教授。昭和八年一月大阪大学教授、十八年一月大阪帝国大学総長昭和四十三年に明治百年を記念して文藝春秋と中央公論がそれぞれ近代日本の開拓者百人を選んでいるが、眞島先生はその両方で科学部門十人の中に選ばれている。また、平成二十三年に国立科学博物館が開いた化学者展には、桜井錠二、池田菊苗、鈴木梅太郎とともに、明治から昭和初期にかけて日本の近代化学、日本の学術研究体制を築き上げた四人として取り上げられている。
- 3 久保田尚志『日本の有機化学の開拓者 眞島利行』東京化学同人 平成十七年
- 4 不揮発性の有機化合物を空気を断って加熱分解すること。分解生成物を調べ、どのような部分構造が含まれるかを知る。
- 5 6 (a) Ber i h t e、四十巻、四三九〇頁(一九〇七年) (b)『東京化学会誌』、二十八巻、一二二五頁(一九〇七年)
- 7 (a)『普通教育 化学教科書』…長俊一・大島鎮治…宝文館…明治四十三年、(b)『普通教育 化学教科書新訂3版』…一九一二年、(c)『参考近世化学講義』…長俊一・大島鎮治…東京宝文館…大正三年、(d)『化学要説高等受験参考』…長俊一・市村秀志…東京宝文館…大正三年、(e)『普通教育 化学新教科書2版』…長俊一・大島鎮治…東京宝文館…大正六年、(f)『女学校用 化学新教科書』…長俊一・大島鎮治…東京宝文館…大正七年
- 8 『米澤有為会雑誌』三八四号、一頁、昭和四年
- 9 直弟子の大学教授十四名のうち、二名(赤堀四郎 阪大、野副鉄男 東北大)が文化勲章受賞者である。他にも有名教授が多い。因みに、孫弟子の教授は三百名を超え、ノーベル賞受賞者の鈴木章名誉教授(北大)もその一人である。山形大工学部にも西鉄之輔(直弟子)、笠原晃(孫弟子)、小原平太郎(孫弟子)の三教授がいた。